

## ツリーハウス式薪小屋

池田 隆

少年の頃、木登りが好きだった。ターザン映画を観ては、彼のようにツリーハウスを高い樹の上に自作したいと思っていた。だが実現叶わず、七十年が過ぎてしまった。

山荘で暮らしていると、膨大な量の薪が必要となる。軒先やデッキの下が割った薪で満杯となった。何処かにまだスペースがないかと、カラマツ林のなかにある敷地を見渡す。するとツリーハウスへの昔の想いが急に蘇ってきた。

垂直に天高く伸びた樹の上に自作することは不可能だ。ただ低い位置に樹木と共生するような薪小屋を作ることには出来そうだ。傾斜面での面倒な基礎工事や柱工事が要らなくなる。薪小屋なので壁は不要、屋根と二層の床があればよい。

幹径約三十センチのカラマツが二本、二メートルほど離れて生えている。その間に一畳寸法の三枚の平板を差し渡してみよう。太い薪を積む下床の板は地上数十センチの高さに設置し、焚付け用の小枝を載せる上床は下床より約一・五メートルの高さに。屋根板はその数十センチ上にやや傾けた片流れ方式で。

思い立ったら気が早い。手持ちのツルバイフォー材やベニヤ板を最大限に利用しながら制作を始めた。自然木には出来るだけ傷を付けたくない。だが幹を二枚の厚い支持板で平行に挟み、左右のボルトで固定していくが、どうしても傾いてしまう。幹が柔らかくでほぼ円形に近いと思えば入るのが間違いだ。実際の表皮は固く、不規則な歪みだらけなのだ。

困り果て、ふと見上げると幹にキツツキが穿った穴跡が並んでいる。その大きさまでなら自然木も許してくれる筈。一・五センチのボルト孔を幹に貫通させ、なんとか取付けに成功する。出来上がったツリーハウス式薪小屋を眺めていると、只の薪置きのみを使うのは惜しくなる。

必要のない期間には、道行く人のための休憩棧敷にしようか、上床はハンモック代りの昼寝ボックスにするか、八十三歳の誕生日に仕上がったので「八さん茶屋」と名付けようか、などなど今は思案の最中である。

